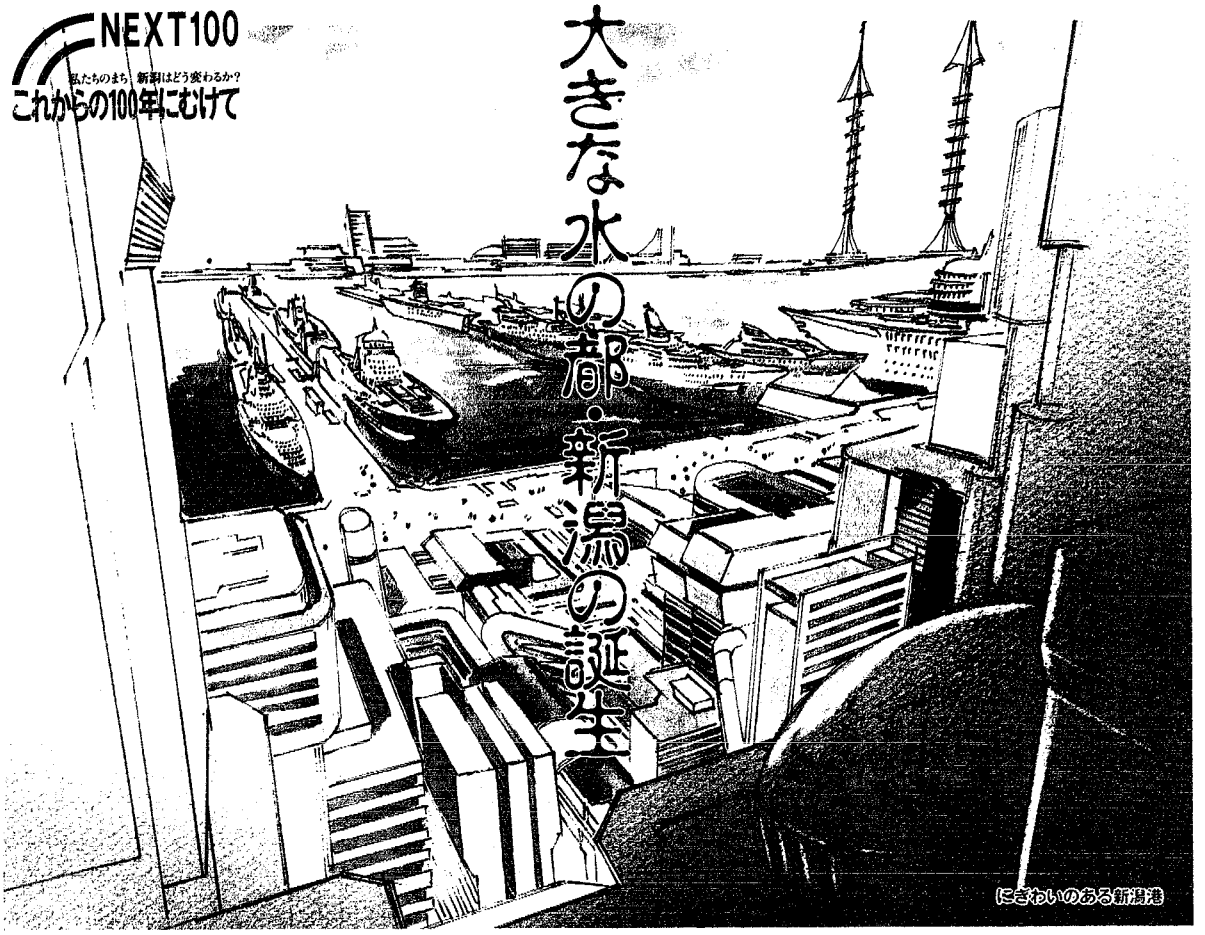
NEXT100
弘たちのまち　新潟はどう変わるか？
これからの100年にむけて

大きな水の都・新潟の誕生



にぎわいのある新潟港

信濃川の河口、港口部ルートのツインタワーが空に舞いあがるようにそびえ、出船入船を歓迎している。新潟港の玄関だ。

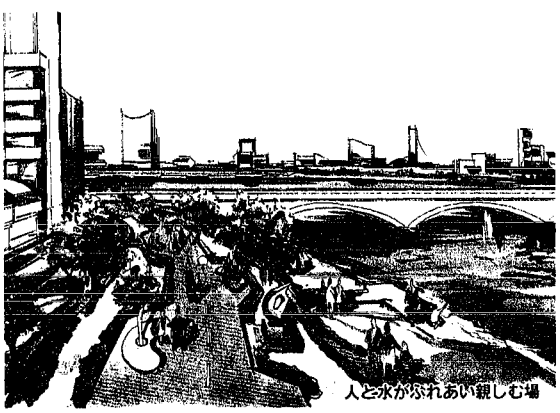
その昔、輸送は全部舟運に頼っていた。元禄のころ、新潟港も出舟入舟三千隻のにぎわいだったとか。以来、鉄道や自動車輸送の時代を経て、また舟運が盛んになった。

新潟港は、対岸貿易の基地として、シベリア開発の玄関口として、貨・客船の出入がたえない。国内輸送も、大量、高速、安価で船便が盛んだ。港のにぎわいは、そのまま、まちのにぎわいになる。港がまちのなかにあるからだ。

まちと港が一体となって整備され、どこにいても港の香りのするまちが新潟だ。

松浜の大漁港に足を伸ばすと、潮騒が肌にしみるような海辺にフイッシュレストラン、海釣り基地、海洋牧場など海をじかに感じる。びっしり並んだ漁船にも活気があふれている。

海ばかりではない。信濃川、阿賀野川の二大河川、鳥屋野潟、佐潟の湖沼。異なった種類の水を上手に生かしている。信濃川は市民憩いの広場に、阿賀野川はボートレース場を加えた市民の運動広場に、鳥屋野潟と佐潟は都市公園に、海岸とあわせてどれもが、人と水がふれあい親しむ場になっている。



人と水がふれあい親しむ場

大きな水の都・新潟の誕生だ。繁華街・高層ビルの間には小さな水の都がある。道路には堀があり、きれいな水が流れ、両側は柳並木、木の橋があちこちに架けられ、昔の八千八川が復活している。この地下に商店、鉄道、共同溝などがあるなんてとても思えない―ゆったりした風景だ。

食べ物のおいしい新潟、これも水のおかげだ。海や川でとれた魚は、そのまま調理されて食膳にのぼる。おいしい米も水が豊富にあるからだ。うまい酒も水。

水の都・新潟はまちのどこにでも感じられる。

水は人間に潤いをあたえ、まちに美しさをあたえる。日本海の夕日、信濃川の万代橋、月の鳥屋野潟、水が新潟を美しいまちに仕立ててくれる。

美しいまちに住む喜びを大切にし、美しい心をもち、いつまでも平和を愛する市民でありたいと思う。

編集に意見、提言を寄せて下さった市民の方々―敬称略

関屋本村町一　駒林行弘（駒林総合計画研究所所長）

西大畑町　木村明（新潟市民病院副院長）

寺尾東一　杉田辰雄（㈱ミサワホーム新潟部長）

五十嵐一の町　西村伸也（新大工学部建築学科助手）

浦山一　小池泰子（AFS日本協会新潟支部長）

関南町　小林しほり（㈱WIT取締役）

中山六　中神陽一（新潟国道工事事務所調査課長）

新元島町　小暮恵彦（新潟三越販売促進部課長）

笹口三　大谷佳代子（㈱アドプレーン・コピーライター）

●　●　●

「市報にいがた」市制一〇〇周年記念号は、駒林行弘さんはじめ、九人の市民の方々からの意見、提言により編集しました。また、一面の〝過去〟の写真は新潟市写真館組合からの提供によるものです。